4. 貞 光 の 町 並 み

剣山の登山口にあたる貞光は、藩政期には代官所が置かれ有数の郷町であった。吉野川沿岸部と広大な山間部への入口という地は、人や物資の交流でにぎわいを見せ、貞光を商業の町として飛躍的に発展させた。その中心地、一宇街道沿いの本町通りの町並みについて考えてみたい。

□個性的な二層うだつの町並み

ＪＲ貞光駅の東にある松尾神社の交差点から始まる南へ約700ｍの道筋には、いまなおうだつを上げた建物が38棟も残されている。うだつは商人の繁栄の証しとして上げられた。

うだつの町並みといえば、県下では、昭和63年12月に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された美馬郡脇町の南町通りや、三好郡池田町の本町通りが残されているが、それらと比較して、貞光のうだつには大きな特色がある。それは脇町や池田町に見られる単層の袖うだつと違って、二層になった袖うだつを上げていることであり、その数は38棟中15棟と多い。その特異な造形は貞光の町並みを個性あるものにしている。二層うだつは通りなかほどに集中して残り、阿佐家・臼井家・岡家と続く景観は、まさに重層うだつの町並みといえる。

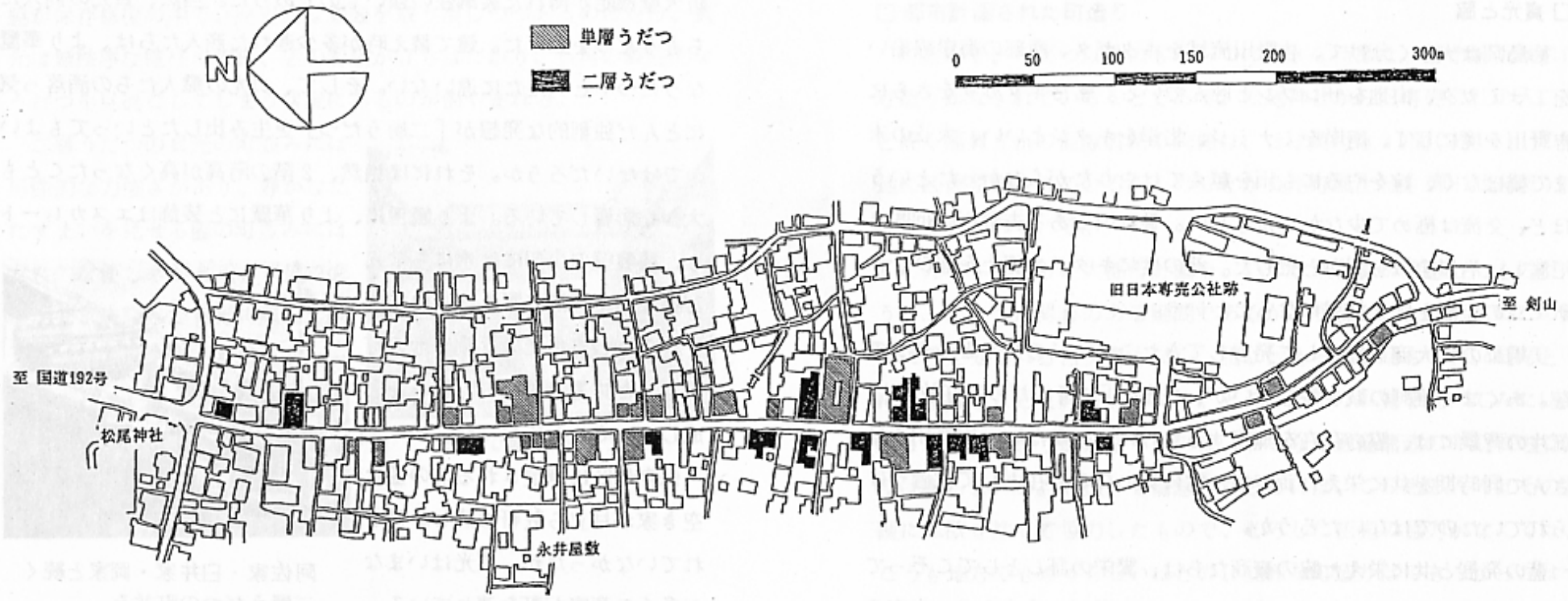
単層うだつと比較すると、二層うだつの造られた時期は、近代（明治）以後と比較的新しいものであるが、これほどまとまった形で残されているのは全国的にみて珍しいといえよう。

庶民に塗り家造りが許されたのは、江戸の大火（明暦3年）後のことで、徳島でも土蔵・藍寝床・藍倉・町屋建築にと広く用いられるようになったが、特に城下町や街道沿いには防火のために用いられることが多かったという。漆喰塗りで造られた防火壁としての袖うだつは、かつて栄えていた街道沿いのいたるところで見られたということであるが、いまも町並みとして昔日の面影を残しているのは、貞光を含めて前述の3カ所しかない。

■本町通りの町並み連続図

東面① ➡

東面② ➡



■本町通りのうだつ分布図

東面③ ➡

東面④ ➡

□ 貞光と脇

徳島県は大きく分けて、吉野川流域をキタガタ、南部の海岸線沿いをミナミガタ、山地をサンブンと呼んでいる。またキタガタをさらに吉野川を境にして、南岸をミナミジ、北岸をキタジといい、大正の末まで橋はなく、嫁をやるにも川を越えてはやりたがらなかったというほど、交流は極めて少なかったらしい。暴れ川である吉野川は何度も氾濫し、沿岸全域を泥海と化した。その度にキタジの肥土を運び、ミナミジの土地を肥す結果になったという。

美馬郡の二大商業地として発展してきたミナミジの貞光とキタジの脇。あくまで推測の域を脱しないが、貞光の「二層うだつの町並み」誕生の背景には、脇の存在を無視するわけにはいかない。吉野川をはさんで同時期を共に栄えた両町は、常に気になる存在として位置づけられていたのではないだろうか。

藍の発展と共に栄えた脇の豪商たちは、繁栄の証しとしてこぞってうだつを上げた。その様式は「袖うだつ」と呼ばれるもので、本来の防火壁機能が薄れた装飾性の強いものであった。当然、貞光の商人たちもうだつを上げた。建て替え時が多少遅れた商人たちは、より華麗なうだつをと考えたに違いない。そして、貞光の職人たちの酒落っ気にとんだ独創的な発想が「二層うだつ」を生み出したといってもよいのではないだろうか。それには当然、2階の階高が高くなったことも大きく影響している。より饒舌に、より華麗にと装飾はエスカレートし、漆喰壁の小口には水にちなんだ個性的な図柄が彫り込まれていく。こうして貞光は、脇や他の町とはひと味違う独自の町並みを形成していくことになった。

保存地区に選定される前の脇は、空き家が目立ち数軒の店しか残されていなかったが、貞光はいまなお多くの商家が軒を連ねている。

阿佐家・臼井家・岡家と続く二層うだつの町並み

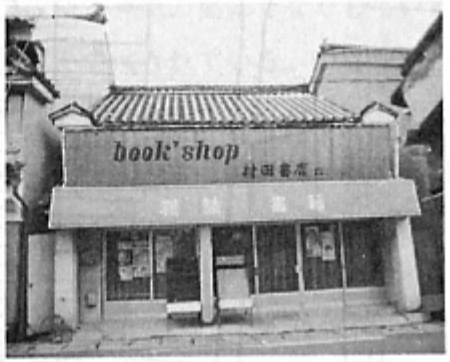
■本町通りの町並み連続図

← 西面①

← 西面②

脇が保存修復の中で、歴史的な景観を取り戻しつつあるのに対し、貞光は無秩序な電柱や電線、店の看板が立ちはだかり、折角の個性的なうだつを見過ごしてしまう状況にあるのが悔やまれる。

二層うだつの貞光の町並みには男性的な力強さがあり、静かなたたずまいを見せる脇の町並みには女性的な優しさがある。「脇で恋を語り、失恋して貞光に帰って来る。」そんな寅さんを思い浮かべる。まだまだ息づいている町ゆえの煩雑さや、気さくな町民気質がそんなことを考えさせるのかも知れない。



看板で隠されたうだつ

□ 都市計画された町造り

町並みで、うだつ以外のもう一つの大きな特徴は、都市計画された町造りがなされていることである。松尾神社から旧専売公社の入口へと続く幅員５ｍの直線道路の両側は、ほぼ奥行き21間（約38ｍ）の敷地に区画整理されている。このことが貞光町風土記（柳川武夫著）にはこう記されている。

『こんなすばらしい大都市計画を、いつごろ、誰が構想したものだろうか。たいへん関心のある疑問であるが、残念なことに直ちにこの疑問に答えてくれる古文書もなく、語り伝える何の話もない。ほんとうに不思議なことというよりない。そこで若干の私見を述べてみたいと思う。この町造りが始まったのは、おそらく徳島藩政の中期頃のことではあるまいか。町造りを構想したときには、この地の人々はその計画に私欲を捨てて協力したもので、こうした祖先の協力がなくては、こうも地方でもめずらしいほどの、立派な町造りはできなかったはずで、まことに祖先たちの偉業には頭の下がる思いがする。』と。

← 西面③

← 西面④

都市計画で、間口５間前後、奥行き２１間の細長い敷地に区画整理された町は、いまも敷地周囲を建物や塀で囲み、中庭や通り庭を持つ町屋形式の住まいを形成している。

□ 魅力的な路地

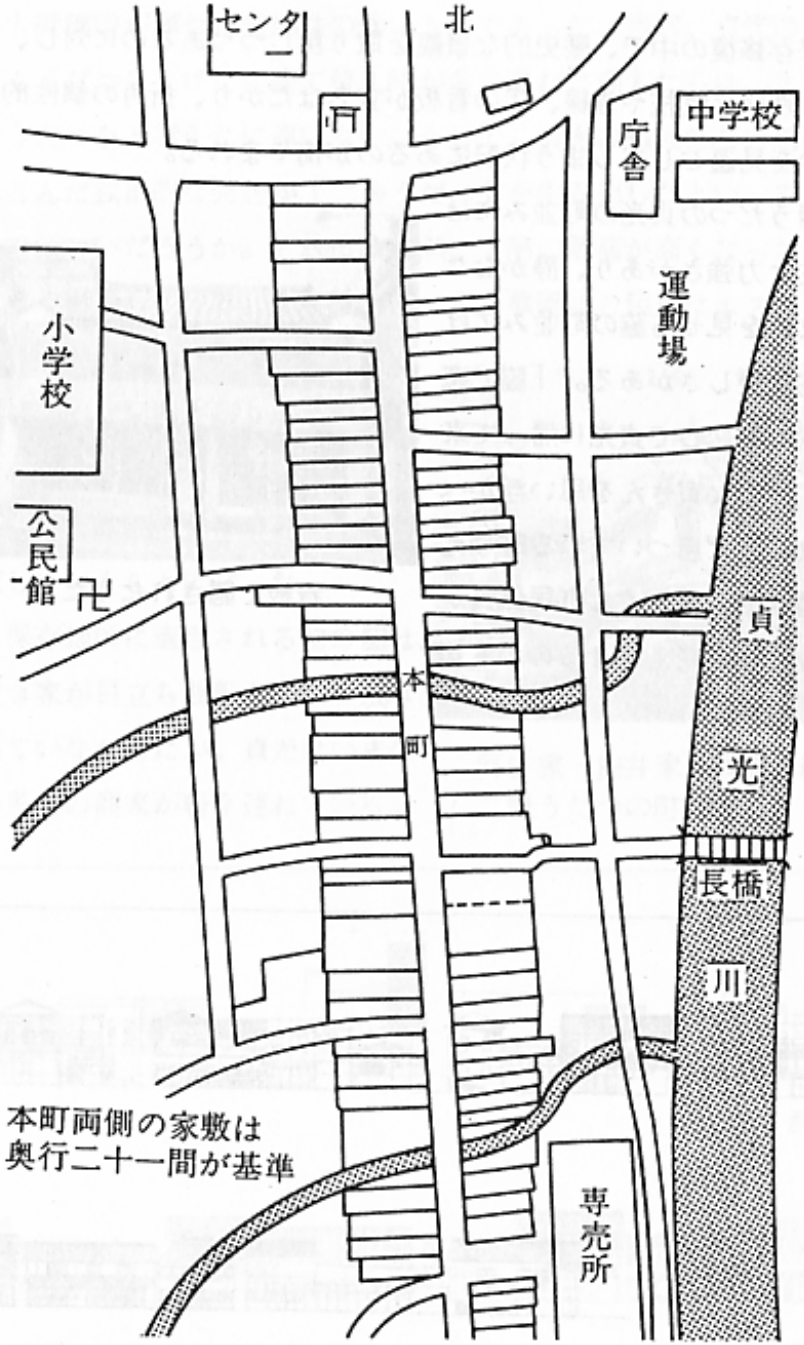
この都市計画は、一方で本通りに直行する魅力的な路地(生活道路)を生み出した。うだつに挟まれた奥行きのある直線的な路地は、両手を拡げると届くほどの広さであり、現在の都市計画には見られないヒューマンスケールの魅力を残している。そして路地のはるか向こうには、季節を刻む美しい山並みを見ることができる。貞光らしさの一面をみる思いがする。

路地から見る山並み

□ 十軒長屋

本町通りの南のはずれ、旧専売公社入口からすぐ南に、驚くほど間口の広い建物がある。地元の人たちは十軒長屋と呼んでおり、かつては職人たちの住宅であったという。１軒の間口は約６ｍ（３間）で、７軒連なり全長約42mである。いまは３軒しか使われていないが、このような長屋が残されているのは県下ではめずらしいという。

老朽化が進む十軒長屋、
２階の階高は低い。



■本町通りの都市計画図（貞光町風土記より転載）

□うだつと共に

化学染料の導入で藍は衰え、煙草工場や製糸工場も閉ざされて、貞光商店街は大きな変化を強いられたが、店じまいすることなく大半がいまも商店を続けている。1階店舗部分は改装で当時の面影をなくしているものも多いが、2階のうだつは昔のままで残されている。いまうだつの歴史的価値が問われている。うだつと共に生きてきた貞光の魅力は、うだつ抜きでは語れない。個性的な二段うだつの町並みは、歴史的景観そのものであり、現存する原風景といえよう。

□街道沿いにあった西洋建築

最後に、現在徳島建築士会名誉会員の酒巻芳保先生が、昭和32年5月、雑誌「日本医事新報」に発表された徳島で最初のルネッサンス建築・谷医院の全文を紹介したい。街道沿いにあった有名な建築も、時代の流れに追随していけなくなり、昭和36年まで医院として使用されたあと姿を消したという。藩の御銀主として藩財政を支えてきた折目家一類の華麗な西洋建築の雄姿をもう一度懐古したい。貴重な資料をこころよくお貸し下さった酒巻先生にこころよりお礼申し上げます。

2. 貞 光 劇 場

松尾神社の交差点から少し西に行くと、一際大きな木造2階建ての建物、貞光劇場がある。かつては歌舞伎劇場として建てられたものであるが、現在は映画館として使用されている。

この建物の概要は次の通り。

□ 建設時期など

劇場建築として現存最古のものは、香川県琴平町の旧金比羅大芝居の建物であり、天保6年(1835)建立である。国の重要文化財の指定を受けて、いまも常設の歌舞伎劇場として使用されている。

貞光劇場も、昭和7年(1932)に常設の歌舞伎劇場として建てられたが、客席、木戸廻りなど各所に改築を受けて、現在の映画館としての機能を持った建物にと変わっている。

□ 規模・構造など

規模は間口8間、奥行き13間の2階建てで、建物左側に3／4間、舞台奥に1.5間の平屋部分が付いている。小屋組は丸太トラス(洋小屋組)を使って梁間方向の8間を飛ばし、屋根を折板で葺いている。

この妻入り切妻造りの建物は、正面の横羽目板外壁をヴォールト状に大きく切り込んだ木戸廻りが特徴的である。正面左側に突き出した部分は、かつての下足預かり場で、現在は便所になっている。

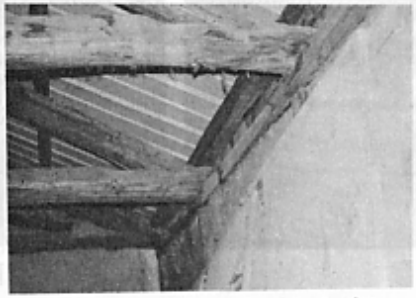
□ 間取りなど

内部1階の客席は、中央に5間×5.5間の椅子席と、左右に奥行き1間の畳の座席で構成されている。舞台に向かって左手の座席は、歌舞伎上演時の花道として使用されていたもので、舞台裏より出てまた舞台へと巡回できるようになっている。椅子席(木で作られた長椅子)は、かつては桝席だったそうで、現在のタタキの土間も舞台に向かってゆるやかに傾斜している。その上部は吹き抜けており、2階の格天井が見渡せる。その格子の中には、当時の商店の勢力を示す広告看板がぎっしりと描かれている。

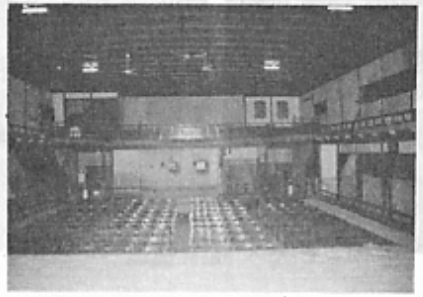
2階客席はすべて畳敷で、奥行き1間の左右の座席と、中央吹抜けの手前に奥行き3間の雛壇状の座席がある。

舞台は奥行き4間で、中央に回り舞台を備えている。直径6.65mの回り舞台は、鳶口を引っかけて回していたという。また舞台上部には

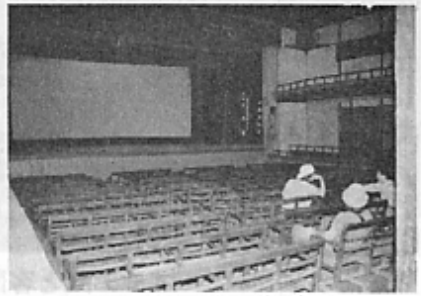
正面外観。左側の突き出した部分はかつての下足預かり場



丸太トラスの洋小屋組細部

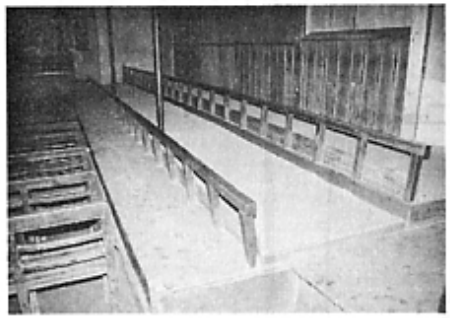


舞台より見る客席

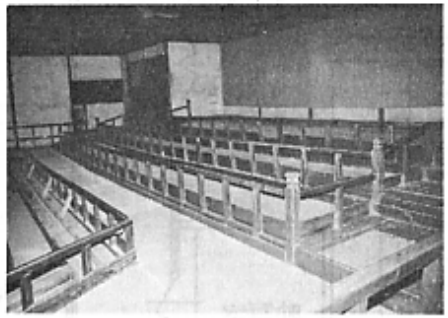


1階椅子席と舞台

竹で組まれたブドウ棚天井があり、舞台右と奥には、楽屋や小道具置場などが付加されている。舞台回りは、いまも歌舞伎劇場の面影を色濃く残しているといえる。

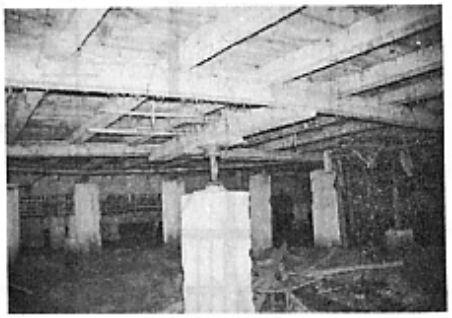


1階左の畳の座席

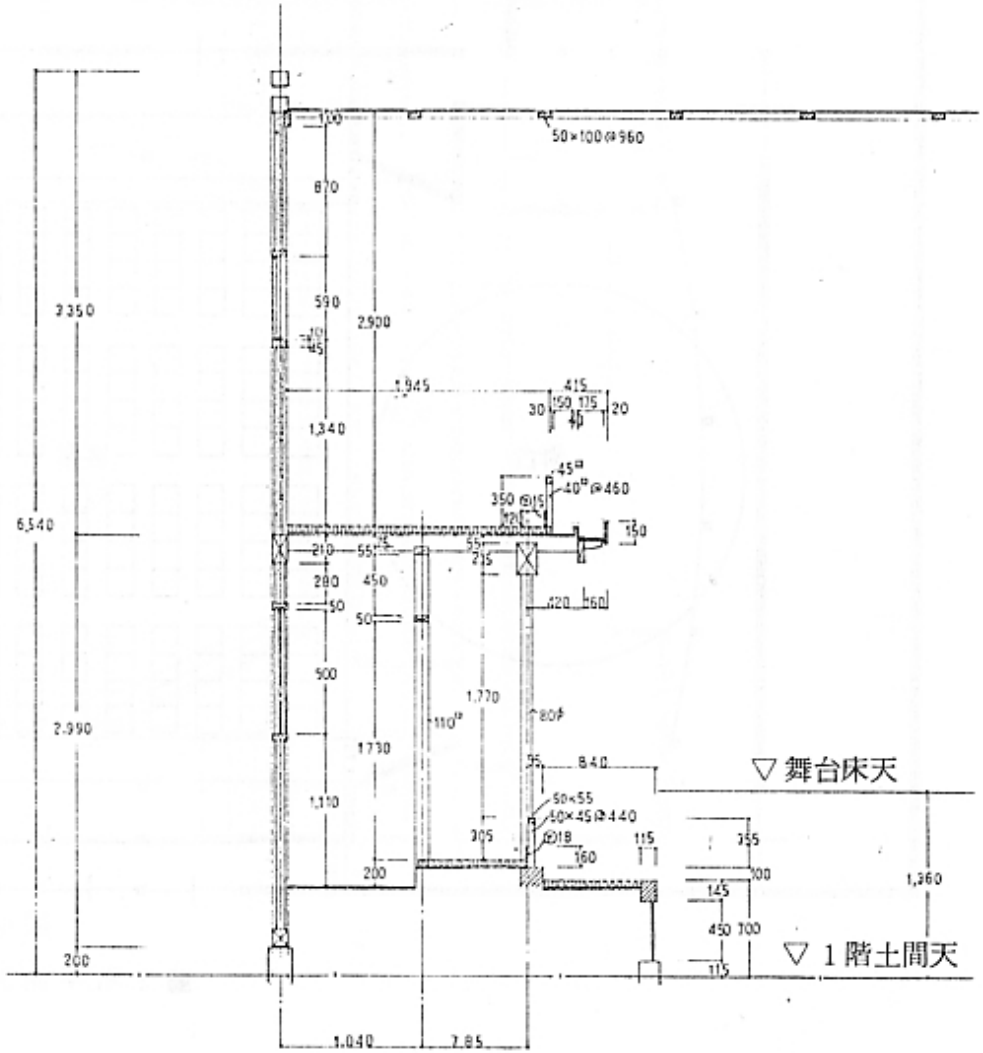


2階畳の雛壇座席　左奥の囲われた部分は、かつての貴賓室

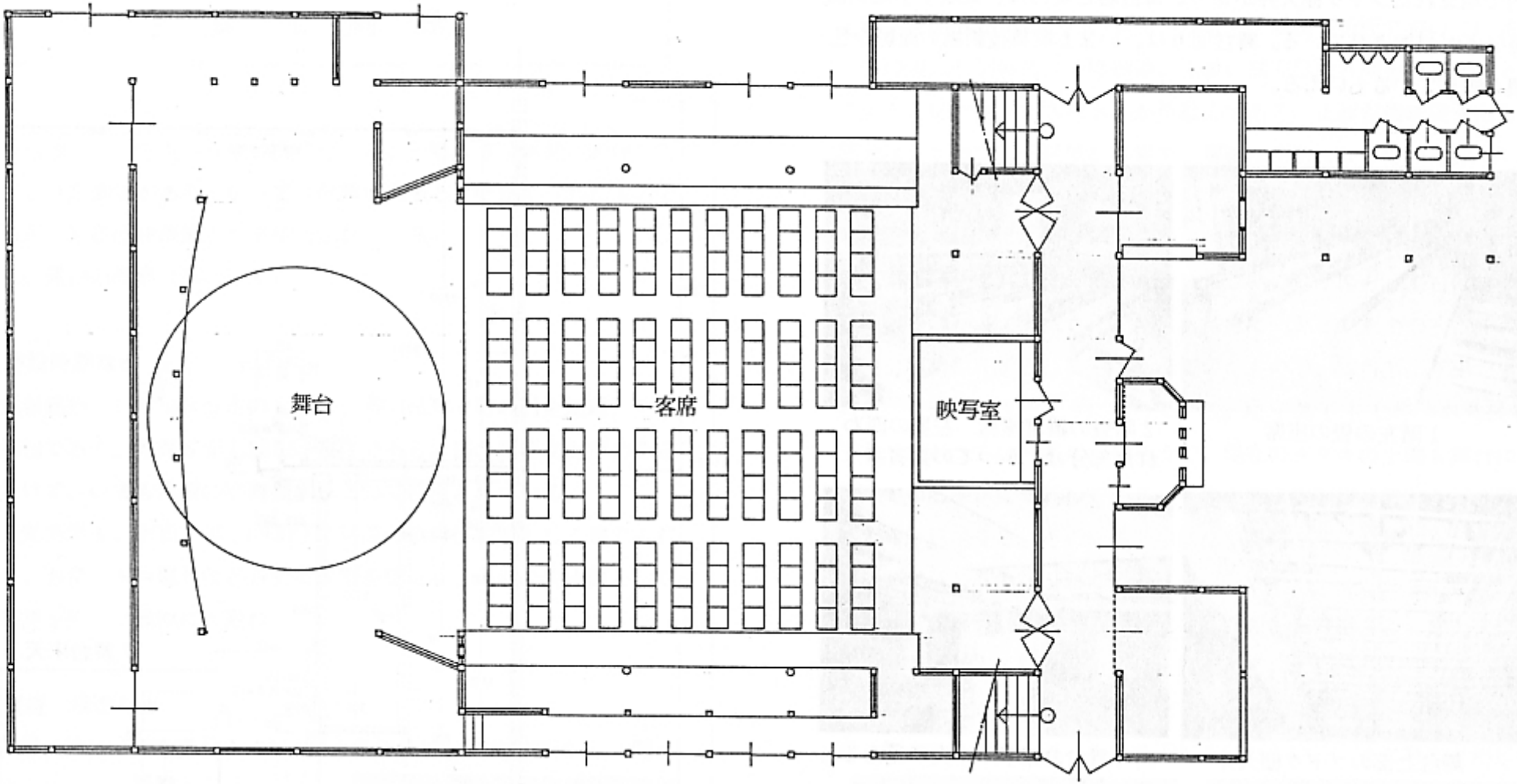
舞台上部のブドウ棚天井



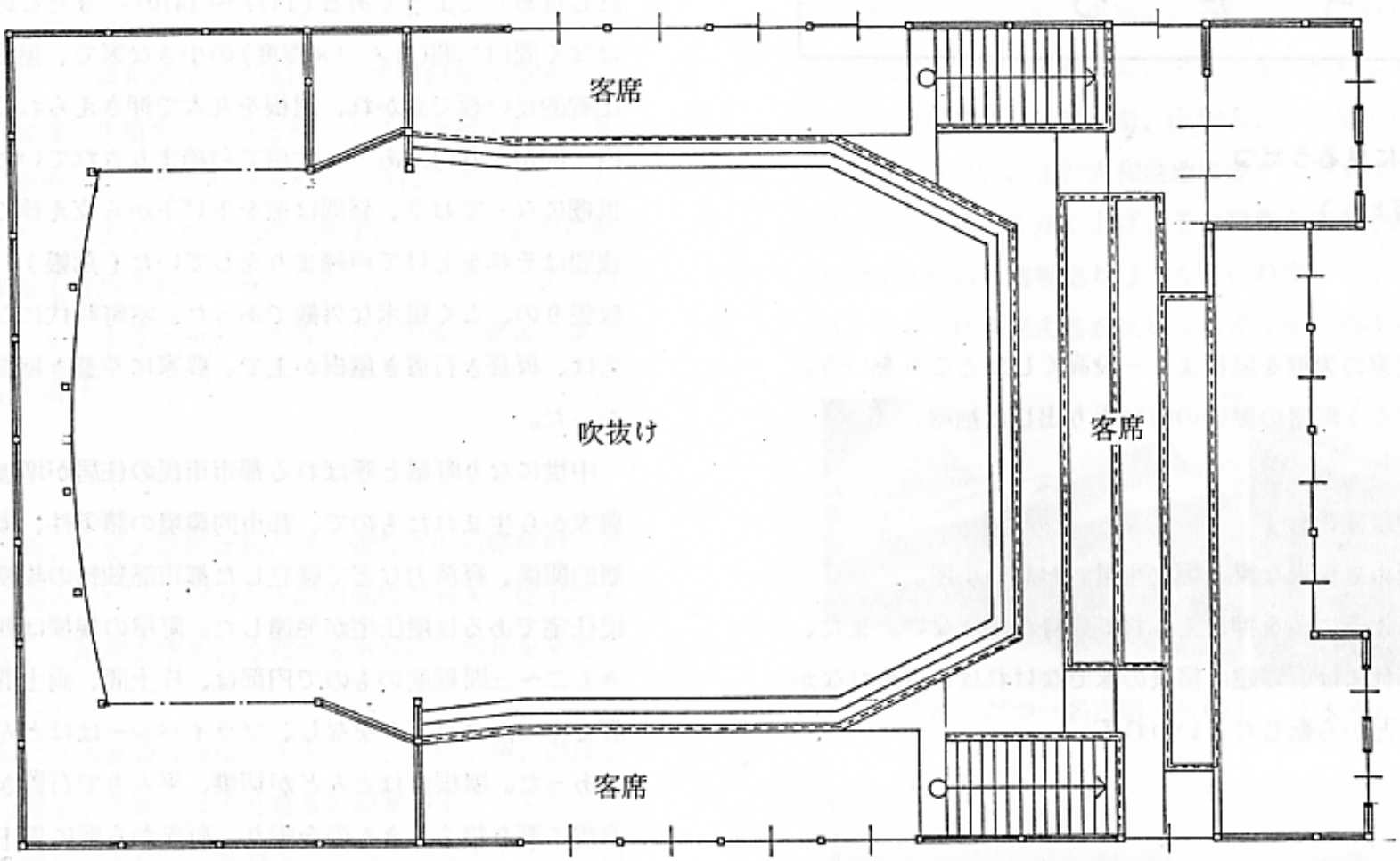
回り舞台の床下　中央に見えるのが芯棒



■ 矩計図



■ 1 階 平 面 図



■ 2 階平面図